

花の夢・夢の花

蓮

夢をみた。

桜井は肩と首に心地よい重さを感じながら歩いていた。足の下は、踏みしめられた土の道。空気は柔らかく、心地よい。時折、涼しい風が頬に吹きつけ、緑の匂いがふんわりと漂ってくる。

目を上げると、視界の中一面が白い花で覆われていた。

いろいろな種類の花があった。桜井の知っているだけでも、山桜、白木蓮、槐、梔子。どれも同じ季節に咲くのではないだろうに、この場所では一斉に花をつけていた。そして、どの花もみな周りと調和して、不思議と煩くないのだった。

強い風が一陣、枝を揺らして通り過ぎ、細かい花びらをまき散らせた。一瞬、目の前が眩しい花吹雪でおおわれた。

きれいだ、と桜井は思った。こんな美しい場所は見ることがない。

髪の毛と額に貼り付いた花びらを、不器用に取り除こうとする誰かの手が触れた。

「おとーさん。はな、いっぱい」

肩の上で身じろぎする、子供の気配。小さなその温もりにはっとする。

「こら、危ないぞ」

桜井は子供の足を両手で抱えなおし、しっかりと掴んだ。

そうだ、自分は娘を肩車して花を見せに来たのだった。

横を見ると、陽子が空色のワンピースを着て笑っていた。手には籐のバスケット。陽子とふたりで作った、娘の好きな甘い菓子が入っている。

陽子は手を伸ばし、桜井の髪についた花弁を細い指先でぬぐった。木漏れ日と、白い花の照り返しを受けて妻の顔は生き生きと輝いていた。

自分もきつとそうに違いないと桜井は思い、陽子に笑い返した。

「おとーさん、おりる」

顔を上げて木々の緑の中になにかを探していた娘は、子供らしいきまぐれでそれに飽いたのか、桜井の頭を揺らした。桜井は体を屈めて娘をおろしてやった。

「走っちゃだめだぞ」

子供は母と父に背を向け、まだ小さい手足を懸命に動かして真っ直ぐに駆けていく。なにを見つけたのか、太い樹の根本にうずくまり、土をいじり始めた。「こら、だめ」

陽子が駆け寄り、娘の脇に手を入れて抱き上げると、娘は小さな虫を手に嬉しそうに笑っていた。

子供は白い花々の下に立ち、木から木へとくるくる回っては枝々の匂いを嗅ぎ、地面に落ちた花びらを散らして遊んだ。初めて見る世界は彼女に優しく、その美しい顔を惜しげもなく分け与えてくれた。

陽が傾き、夕暮れの光が彼らのいる場所を下から赤く染め、静かな水底に沈めていく。そのときが来ても、子供は心から幸せそうで、笑顔だった。陽子はそんな娘を優しい目で見守っていた。

桜井は夕焼けに透ける子供の後ろ姿が最初に見たときより大きくなっていくことに気づいた。彼女はすでに幼児ではなく、少女だった。

彼らは娘を真ん中に三人で手を繋ぎ、夕陽の中を歩いた。もはや誰も口を利かなかつた。群青色のグラデーションに染まった空に、丸い月が昇りつつあった。

日が沈んでも、月の光に照らされて頭上の花は白く輝いていた。暗い道に行く先は霞がかかっていて判然としない。ただ、花だけが暗闇にぽっかりと浮かんでいた。

娘が立ち止まり、繋がれていた両親の手を解くと、軽やかに走って彼らの先へと踏み出した。

桜井はその場にとどまっていた。陽子が後を追おうとするのを、腕を掴んで引き止めると肩を強く抱きよせる。道の向こうから風が吹き、二人の顔に吹きつけた。

娘はしばらく行くと振り返り、きらきらと舞い落ちる白い花びらを背景に、桜井と陽子を真っ直ぐに見て笑った。

「おかあさん、おとうさん。ありがとう」
美しい顔だった。桜井はその瞬間、娘の笑顔が白い花と同じものなのだと悟った。

「わたしをこの世界に生み出してくれて。世界を見せてくれて、ありがとう」
娘はそれだけ言うと、身をひるがえし、父も母も手の届くことのない暗闇の中に走り去った。

残されたふたりは相手の体を固く抱きしめながら、互いの体温だけを標に寄り添っていた。